

スラヴ文章語について

山田 勇

I はじめに

筆者はスラヴ語比較研究の一つのフィールドとしてこれまで、ブルガリア共和国の古都、ヴェリコ・タルノヴォを訪問してきた。大学の所在する地名スヴェタ・ゴラが、「南スラヴのロシア文章語に与えた貢献」と密接に関わっていることを、幾度かの本学で開講されたセミナー訪問などで学ぶところとはなっていたものの、詳しく触れる機会はなかったこともあり、現地で蒐集した資料を交え、この地の民が広くスラヴの民衆になした「貢献」に些かなりとも触れてみたいと思う。

この大学は正式名称をキリル・メトディ名称ヴェリコ・タルノヴォ大学と称する。大学内の小高い丘では、その昔、スラブの人々に自らの文字を齎らした聖兄弟が座した姿で、訪問者を迎える。同じ座像は、現在では、別の隣国となったマケドニア共和国のオフリッド湖畔でも見いだすことが出来る。また、ブルガリア総主教で、古ブルガリア語の浄化に多大な貢献をなした、エフティミ師が、東方に両手を掲げて、起立し、民衆に呼びかける姿も、本学を訪れる者に訴えかける何か、熱意といったものを感じさせて印象深い。入学式はアウラと呼ばれる講堂でなされるのが通例だが、キリル・メトディの聖兄弟像を背景に

して行われることもある。聖兄弟がブルガリアの人々に敬愛されている様子が偲ばれる光景である。

II 聖兄弟とタルノヴォ

1 ヴェリコ・タルノヴォ大学

ヴェリコ・タルノヴォ大学はタルノフスカ文語学校の後継者である。その証は、タルノフスカ文語学校が存在したスヴェタ・ゴラの丘だけでなく、まさにその丘の上に大学が建設されたことに象徴されるようである。具体的に見れば、1963年の秋にヴェリコ・タルノヴォの歴史的で絶妙な景観のこの地の丘に、首都ソフィア以外で初めてとなる大学が扉を開け、開学した。

その前身たるタルノフスカ文語学校は1371年に創立され、権威ある中世の大学として名声が高かった。本文語学校はスラヴ文章語の浄化運動を中心に、文学活動を行い、ブルガリアの文学・文化的伝統を守った。この学校はまた、後述の如く、ロシア、セルビア、ルーマニアの文学活動の発展に幾多の影響を与え、これら地域の教会の活動にも貢献した。現在の、ヴェリコ・タルノヴォ大学はこうした文学活動の後継者であり、また、その学派の伝統を発展させているのである。1971年には、タルノフスカ文語学校建学600周年記念国際学術シンポジウムを開催した。

大学は、聖兄弟キリルとメトディオスをパトロンにもち、14世紀に創建された有名なタルノフスカ文語学校の教養と文化の伝統を受け継いで、人文科学と技芸に関する、高等教育機関として、また学術センターとして設立された。初期の建学者たちは「はじめであればこそ重要である」とブルガリア復活の活動家ソフロニー・ヴラチャンスキの言葉を念頭に置いていた。彼らは、帝都タルノフグラッドの古い文化的伝統、エフティミの文語に関する改革理念および郷里愛の心を、自らの意気盛んな学生達に呼び起こす為に建学したのであった。このことは、ヴェリコ・タルノヴォ高等学校の初代創設者の中に、ゲオルギ・ディ

モフ、イワン・ガラボフなどの全ての権威ある、あの時代のブルガリアの人文科学を代表する教授陣の名を見いだせることに思いをいたせば、十分理解できる。

1963年9月15日の高等教育大学建学の日アレクサンドル・ブルノフは、次の2つの新高等学術機関の課題に取り組むと表明した。まず、この大学では高度に技能資格認定された教師、研究者、芸術家などの専門家を養成するのであり、本学はブルガリアの学問の新しい中心として建学されるのであると。大学では人文科学的精神が教育され、学術研究活動が積極的に推進された。それと同時に、師範の専攻数、学生と教師の数が増え、新しい講座の定員の充足が続き、学部が拡充整備され、かつ研究資料の蒐集にはげみ、教育技術が近代化された。ブルガリアでは今でこそ私立大学が新たに建学され始めているが、当時は、総合大学は本学、ソフィア大学と、岡山市が姉妹関係を結ぶプロヴディフ市のプロヴディフ大学のみであった。

2 スラヴ文章語とスヴェタ・ゴラ

スヴェタ・ゴラはスラヴ文章語の成立の縁の地でもあるので、そのことに関し、大モラヴィア帝国の王、ラスチスラフの事跡から説明を始めよう。彼がヴィザンティン帝国の皇帝に宣教師の派遣を依頼したことが、南スラヴのロシア文語に対する貢献の端緒となった。ヴィザンティン帝国の皇帝は当時ブルガリア領だった、テッサロニキ出身の哲学教授コンスタンチノスと兄の司祭メトディオスに依頼し派遣することとした。この兄弟は、ギリシャ語とブルガリア語に詳しくあったこともありモラヴィア地方の言語状況を予測して、現地のスラヴ語に相応しい文字を創作し、現地語で法話をいとなめるよう、聖書の翻訳などを準備し、現地に赴いた。この時作られた文字で現代に伝えられているのは2種類あるが、その何れを聖兄弟が作成したものかは定かではない。参考にしたスラヴ語はマケドニア方言である。当時、スラヴ民族の言語はそれほど方言化が進んでおらず、バルカンのスラヴ人とその他の地域に住むスラヴ人は理解が可能であった。現地で布教後、3年して2人は一時、ローマに戻った。コンスタンチノスはここでキリルという名を教皇から拝命したが、869年に亡くなった。

兄のメトディオスはモラヴィアに戻ると、同地域ではローマ正教の影響力が強まっており、隣人のフランク王国が力を蓄えたことども、不遇のうちに885年に亡くなった。

大モラヴィア帝国は906年に滅びるが、彼らの弟子たちは、ブルガリアでボリス王に暖かく迎えられ、布教活動を再開した。9世紀に、ブルガリアは第1次王国時代を迎え、ボリス帝は曲折の後、ヴィザンツを後ろ盾とする教会組織を構築した。この時代、ブルガリアには自らの文字が存在せず、ギリシャ文字で表記していたが、教会での法話がギリシャ語でなされたことなどの不便さを感じていたため、聖兄弟の高弟たちが快く迎えられたのであろう。そこでボリスはスラヴ語を用いた布教を通じてブルガリア人聖職者を養成し、教会文献をスラヴ語に翻訳する作業に従事させた。

彼らのうち、クリメントは現マケドニアのオフリッドに聖パンテレイモン修道院を建立、スラヴ典礼をよく知るブルガリア人聖職者を養成した。彼は現在使用されているキリル文字の創始者であると言われるが詳らかでない。また聖兄弟の別の弟子、ナウムはプリスカで典礼書の翻訳に従事し、後にクリメントの活動を継いだ。彼らの弟子のうちポーランドで布教活動と民衆の教育にあたった者もあった。キリルとメトディオス兄弟の活動は、先進のヴィザンツ文芸を欧州の南部から西、東部に分住したスラヴ人達に普及するという大きな意義が認められた。彼らの使用した言語は古ブルガリア語と呼ばれる。この古教会スラヴ語がロシアへ入り、ロシア標準語の基礎が南スラヴの影響を受けつつ創られた初めてのケースとなった。

こうしてスラブ語とギリシャ語の素養を身につけたブルガリア人僧侶は、翻訳とならんで独自の著作活動も行った。それらの作品には、あとで紹介するイヨアン・エグザルフの『六日記』などがある。

3 タルノフスカ文語学校

キリルとメトディオス時代から受け継がれた、文学的伝統は黄金のシメオノフ時代を背景に、テーマと範疇の多様性と美学的立場を統一し、ブルガリア語

を統一浄化するという考えから、また、イシハズム・静寂主義¹の理念的基礎とそれをテオドシー・タルノフスキの主宰したキリファレフスカ学校の標準語作業とに、明快に関連づけ、ヴィザンティン教会の文献を再評価するため、タルノフスカ標準語学校が創立され、伝統の基盤が固められた。タルノフスカ標準語学校は、ボリス公（865年に洗礼を受け、ブルガリアをキリスト教国にした）からシメオン帝（893年に即位、封建制度を確立させた）の時代にかけて充実した時代を迎えた。タルノフスカ文語学校が自らの文学活動で、或いは他の芸術分野で顕著な業績を残したが、殊にブルガリアの封建時代が確立された、タルノヴォ第二王朝時代の最後の10年間に、彼らの知的で創造性に溢れた活動は壮大で、急激な高まりを見せた。15世紀のトルコによる専政時代を目前にしたこの時期の発展は、エフティミ、グリゴリー・ツァンブリャック、キプリアン、コンスタンチン・コステネッチキ、イヨアサフ・ブジンスキなどのようなこの上もない個性あふれる、輝かしい創造者たちによって、支えられていた。彼らの中でもっとも明瞭にたち現れるのはエフティミ・タルノフスキで、彼は、タルノフスカ文語学校の理論的指導者でもあった。

III スラヴ語の改革機運

1 第二次ブルガリア王国とヴェリコ・タルノヴォ

第一次ブルガリア王国は927年に、シメオン王の病没後、後継者ペタルが親ヴィザンツ政策をとり、ブルガリアの文化的伝統に打撃を与えたこともあり、国力が衰退した。1185年に北部ブルガリアのタルノヴォ地方におこった貴族イワン・アセンとペタルの兄弟に指導された反乱がもととなって、第二次ブルガリア王国が誕生した。アセン一世（1187年—1196年）からその相続者カロヤンの治世下にブルガリアはバルカン半島における強大国となり、イワン・アセ

¹その信奉者達が禁欲主義的生活と自己沈潜することで神と一体化しようとした13世紀～14世紀のヴィザンティンやブルガリアで受け入れられた宗教上の教義

ン二世の治世下で、全スラヴ民族の政治的および文化的統合というシメオン帝以来の宿望を達成した。第二次ブルガリア帝国時代、イワン・アレクサンドル帝の文化政策の結果、帝都タルノヴォを中心に文芸活動が活発に行われた。例えば美術では壁画や細密画が発達した。タルノヴォ派の画家が教会にカロヤン帝とその一族の肖像画を描き教会を飾った。また、ヴィザンツ様式の細密画が数多く福音書の写本を装飾した。

2 古ブルガリア語の浄化運動

この時代に文学活動も最盛期を迎える。先にも言及の如く、教会で用いられる言語は修行僧の写筆により伝承されるが、不注意による誤写によって、また、それぞれの地域で用いられてきたスラヴ語の方言化がすすみ、部分的に誤って文献にその語形が入り込むなどで、文語の乱れが生じていた。このような乱れを修正するため、僧侶達がタルノヴォの修道院やアトス山の修道院で、不完全な翻訳の修正および新しい写本の翻訳を行なった。この分野で幾多の業績を上げたのがブルガリア総主教のエフティミ（1325年 — 1402年）で、彼はコンスタンチノーブルとアトス山の修道院で修行し、ブルガリアに帰国後、ヴェリコ・タルノヴォのスヴェタ・ゴラに修道院を創建し、タルノフスカ文語学校で活発に文学活動の一派を主宰した。彼は説得力ある文体で文語の浄化を訴え、ブルガリアおよび他のスラヴ諸国の文学に大きな影響を与えた。

エフティミの人格と彼の画期的な文学上の業績は彼の同時代人からも定評があった。コンスタンチン・コステネッチキは根拠を示して、彼をスラヴ文語における偉大な芸術家と称した。一方、イヨアサフ・布林スキも感嘆し、最も高く評価し、次のように書いている。「エフティミの言葉が機能しなくなるのなら、太陽が消える方がまだましである。」と。

エフティミの生涯と業績は全ブルガリア人民とスラヴ人ともに帰せられ、彼らのものであるが、何よりもまずタルノヴォの人々と関わっている。未来の総主教はツァンブラコフツィの名門の出で、ヴェリコ・タルノヴォで1325年 — 1330年ごろに生まれた。テオドシイがキリファレヴォで自分の修道院を創立した時、

エフティミは既に修道士であったが、そこへ赴き彼の弟子となった。修道院で彼はイシハズム・静寂主義の根本法則をおさめ、一方、それと同時に、その原理に確かな組織方法を示したので、テオドシイは彼を自分の最初の助手にした。

修道院でエフティミとテオドシイはブルガリア人民と教会の先行きを案じ、差し迫った敵、トルコの襲来を目前にして、困難な使命のために準備する必要がある精神的指導者として、協議を重ねた。それで、1363年にテオドシイがツァリグラードで仕事を始めたとき、そこへエフティミも出発した。ヴィザンティンの首都とその後ストゥディーースク修道院、スヴェタ・ゴラ、聖アタナーシイとゾーグラフスク修道院でエフティミは当時の東ギリシャ正教文化の最も重要な代表者として知られるようになった。

ツァリグラードとツヴェタ・ゴラで流れた8年の年月は彼の仕事の成就に決定的役割を果たした。スヴェタ・ゴラ（現在のヴェリコ・タルノヴォ大学の所在地）にはグリゴリー・シナイートもいた。そこでは多分、エフティミが彼の作であると踏んでいた古文書の著者、教導僧イヨアンが働いていた。このようにスヴェタ・ゴラには、当時のもっとも整備された図書館も既に幾らか揃えられていた。文化、芸術、文学の深い伝統を育んだスヴェタ・ゴラで、エフティミは文学研究者として自分の文語浄化運動の準備を精力的にすすめた。

当時の哲学的宗教的理念の成果と、ヴィザンティンの作家の創作に熟知した上で、彼は更にそこで自らの文語に関する仕事を始めた。ヴィザンティンからタルノヴォへ戻って、エフティミは、精力的に協力者たちと、教育と、創造的な活動に取り掛かった。彼は皇帝イワン・シシマンの援助で町の西方に多くの生徒を集めた聖トゥロイツァ教会を建立した。

3 エフティミ・タルノフスキの改革

更に、エフティミ総主教は、後に中世大学の典型となる啓蒙と学術研究の場としてタルノフスカ文語学校を開いた。当時、宗教上の教義の解釈をめぐり、異端が生じたが、無学のために異端のズレをもたらした長年の誤謬を回避するために、エフティミは標準語プログラムを作成し、ギリシャ語からの古い翻訳を

原文と照合することに尽力した。その必要性をグリゴリー・ツアンブリャックも以下の如く指摘した。「しかし貴方は何を翻訳しているのか。教会関係の本をギリシャ語原典からブルガリア語に直し翻訳しなさい。」ブルガリア人の洗礼の始まりから十二聖像のなかの偉大な人物をときあかした宗教書は時がたつにつれて、古くなってしまった。しかし、こうなるにはそれなりの理由があった。最初の翻訳者は古代ギリシャ語と古代ギリシャ人の博識を究極まで深く理解したので、問題はなかったが、それらは本に書き次がれるうちに、表現の緻密さが失われ、結局荒い言葉で祈祷するようになった。その本は高文体で記述されておらず、また思想が整然と表現されず、論理の流れも不自然であった。そこで、教義を正確に理解することが不可能となり、一方で真面目な原理を説くという矛盾が内在するようになった。それでそれらから多くの異端が発生したのである。こうした状況に対して、エフティミは聖トロイツァ修道院で文語改革の原則的条件を提示した。

確かに、この問題に関するエフティミの信条に関わること、また彼の理論的論文は現代に伝わっていない。しかし、論理的には以下の如く推定できる。彼は、あらかじめ、彼の学校の文語改革で提案する論拠とその論証を準備した。それに関する提示がエフティミ自身の著作や彼の弟子と後継者、コンスタンチン・コステネッチキ、グリゴリー・ツァンブラック、キプリアン、イヨアサフ・ブジンスキ、アンドウレイ・バチコフスキ、修道士ガブリエル他の著作の中にある。エフティミの改革は広範な領域にわたって思量された計画的な仕事であった。ギリシャ語で表現されたオリジナルな教義に立ち返り、基本的目的を実現し、教育的課題を遂行するために、重要と考えられたのは、上部構造的要因として実在する文学と芸術上の成果に関わることであった。また、文語の浄化運動の持つ意味は、つまるところ国家全体の目的に組み込まれる必要のある文化的統一であり、そのための概念形態の統一を達成するという仕事でもあった。改革への個々の目標は次の方向に向けられた。時の経過と共にキリル・メトディオスの祈祷書への翻訳は（より多くの場合、一般に写本は、原本からの翻訳を照合しないが故に）ギリシャ語の不十分な知識と、ブルガリア語の置かれた言語環境

から招来される自然発展とも相俟って、幾世代にもわたってその写本が原義から離れて流布された結果、可成り本質的な変質を被った。この頃、殊に統語システムの観点でブルガリア語を言語類型学から見ると、この言語が「総合的体系」を崩壊させ、「分析体系」偏重へ完全に移行しつつあった時代を迎えていたのである。この時代にブルガリア語の口語は文語の態勢とは大きくかけ離れた。その為、有る所では普通の写本について理解することが困難になったことさえある。こうした状況下では、特別の言語上の教養がない人が、文語文献の古い翻訳の清書を行う場合、その訳文にほとんど自由に生の口語、新しいブルガリア語の特徴を浸透させてしまっていた。それと共に原文から、意識的、無意識的ずれが生ずるに至った。こうした言語的、意味的ずれが内容の歪曲、誤謬に至らしめ、独断に基づいたテキストの新解釈への、また異端を発生させる理論的前提条件が生みだされた。そこで、新たな教義内容の審査の課題は以前の翻訳の基本的確認や（祈祷に関するものもそうでない物も）東方教会に必要な全ての本を新しく翻訳し直すことにまで及んだ。それらは、福音書、キリスト教の師徒伝教、聖詠経（昔は教科書代わりであり、一般に旧訳、新約聖書）奉事経、聖事経、聖体礼儀、聖人伝、レストヴィッツァ（職階伝）、ローマ法典、アンティオフ法典、ニコノフ法典等である。教会システムの改革とエルサレム法が導入され、ミネイ、トゥリオッド、オクトイフ他の大賛歌集の翻訳と校訂がなされた。それと共に同時代の賛歌集と聖人伝は、特にイシハズム・静寂主義の観点から、創作が行われた。例えば、ツァリグラードの総主教カリスト、グリゴリーシナイトゥと総主教フィロティの賛美歌によるグリゴリーシナイトゥ、テオドーシー・タルノフスキの伝記は後継の聖詠経や祈祷にまで影響を与えた。

タルノフスカ文語学校はスヴェタ・ゴラでブルガリア人翻訳家の仕事と深く結びついている。エフティミが14世紀前半にその生徒であった「聖アタナシー」大修道院で働いていたのがブルガリアの文学研究家の教導僧イヨアンであった。

彼の弟子、メトディオスが証言しているように、彼は4つの福音書、聖詠経、経験豊かな使徒、聖体礼儀、正教会の典礼法規（礼拝の手引き）、生神女（ダマスカスの）、神学（ダマスキンの）、イサク（シリン）、バルラーム、ドロテ

イ（アンチオフの法典）などを翻訳した。ポステン三歌斎経 23 条にみえるガブリアル修道士の覚え書きによると、ゾーグラフ修道院では以下の別のブルガリア人も働いていた。三歌斎経を翻訳した教導僧イヨシフと三歌斎経の連作について聖者伝集から翻訳したザクヘイ・フィロソフの 2 名である。聖人伝と説教学集の翻訳と校訂作業がブルガリア人文学研究家によって始められ、彼らはツァリグラッド、特にスヴェトゴルスク修道院で働いていた。さらにこの仕事にはエフティミも明らかに参加していたと思われる。

エフティミはまた教育に心血をそそいだので、彼の元に多数の優れた人材が集まった。しかし、時はこの地域のオスマントルコによる制圧時にさしかかり始めたため、彼らは祖国を離れて、師の業績を中心とするブルガリア文学の成果を携え、ロシア、セルビア、モルダヴィア、キエフを中心とする西南ルシの地に普及させる旅に出た。キプリアンはキエフの主教からモスクワの府主教になった入物で、ロシア正教会の指導者として活躍したこともあり、ロシア文語に第二の南スラブの影響を与えた識者となった。彼の甥グリゴリー・ツァンブラクはセルビアに赴き、さらにモルドヴァやリトアニアで活躍したあと、キエフの府主教となった。この事実をもとに、岡本は南スラブのロシア文章語に対してなした貢献が三次に亘り認められると、当時のキエフを中心とする西南ルシの教会スラブ語の改革が始まる過程を考察している。（文献参照。）そのほか、セルビアで活動した修道僧もあった。

IV エフティミにとって端正な文体とは

まとめにかえて

1 古ブルガリア語文献とヴィザンツ文学

ディミタル・ケナノフは古ブルガリア語文献とヴィザンツ文化の文学の相関関係に注目して、ギリシャ語原典と 9 世紀の教導僧イオアン・エクザルフ・バルガルスキ、14 世紀のエフティミ・タルノフスキの翻訳の特性を分析した。ブルガリアではイオアン・ダマスキンなどの神学遺産への関心は 9 世紀から 14 世

紀にかけても中断されることはなかった。古ブルガリアの作家、イオアン・エクザルフ・バルガルスキやエフティミ・タルノフスキらがキリスト教信仰の影響力を深めようと努力する中で絶えず^{いにしえ}古のヴィザンツ文学での経験を手本として生かした。

ПАТРИАРХ
ЕВТИМИЙ:
„НЗ ЖНТНЕ НА
НЛАРНОН МЪГЛЕ-
НСКН“:

СЛОВО КРЪСТ-
НОЕ ПОГЫБАЩІ-
НМЪ ОУБО БОУНС-
ТВО ЕСТЬ, СПА-
САЩНМЪ ЖЕ СЯ
НАМЪ СЛА БО-
ЖНА ЕСТЬ/1 КОР.
1,18/. ДЩЕ ОУБО-
СЛА БОЖІА
ЕСТЬ КРЪСТЬ,
ЯКОЖЕ Н ЕСТЬ
ПО УТО СЛА БО-
ЖІА НЕ ВЪРОУЕТЕ?

ЙОАН ЕКЗАРХ:
„W КРЪСТЪ ЕЖЕ
Н W ВЪВЪ“:

СЛОВО КРЪСТНОЕ
НЗГЫБАЮЩНМЪ
ОУРОДСТВО ЮС-
ТЬ. СПАСАЮЩНМ
ЖЕ СЯ НАМЪ СЛА
БЖНА ЕСТЬ/1 КОР.,
1,18/. ДХОВЪНН
ВСЬ РАСОУ—ЖА-
ЕТЬ. А ДШЪНН
УЛКЪ ПРНМЕТЪ
ДОУХОВНАГО/ 1
КОР. 2,15/. ОРО-
ДСТВО БО ЕСТЬ.
НЖЕ НЕ ВЪРОУ

ΕΒΤΙΜΙΗ ΖΙ-
ΓΑΒΙΝ:

Τοῦ Δαμασκηνοῦ
περὶ τοῦ σταυροῦ

Ὁ λόγος ὁ τοῦ
σταυροῦ, τοῖς μὲν
ἀπολλυμένοις μω-
ρία ἐστὶ, τοῖς δὲ σω-
ζομένοις ἡμῖν, δύνα-
μις θεοῦ ἐστίν.

Ὁ μὲν γὰρ πνευμα-
τικὸς πάντα ἀνακρί-
νει, ψυχικὸς δὲ ἄνθ-
ρωος οὐ δέχεται τὰ
τοῦ πνεύματος. Μω-
ρία γὰρ ἐστὶ τοῖς μὴ
πίστει δεχομένοις,

文献 [1] p.41 より

罫線は筆者のもの

ここで、ケナノフは使徒パヴェルの書簡体に関する福音書の引用で教導僧エグザルフとエフティミ総主教の翻訳の質を分析しているが、最初に両者の使用語彙の差異に注目している。ギリシャ語の単語 *μωρία* はエクザルフの場合 „оуродство“ (И. Срезневский の訳では „БЕЗУМІЕ, ГЛУПОСТЬ“) であり、エフティミの場合は „боуиство“ (И. Срезневский の訳では „ПРОСТОТА, НЕВЪЖЕСТВО“) の訳語を使用していると分析する。これを筆者はエフティミ

の「使徒パヴェルによる信仰への賛美」の総括の現れとしている。更に2つのテクストについて幾つもの他の観察を挙げることが出来るが、しかし、明らかなことはエフティミが好んで用いる「文字文化、宗教の理性」という言葉と「祭式芸術」書への尊敬は何れも彼の信仰観（イシハズム・静寂主義）によるところが大きいという点である。タルノフスカ文語学校がその活動で熱心に心がけたことは、聖書への可能な限り神聖で、もっとも信頼できる内容と、教会に対するギリシャ正教の神父の解釈を正確に記述することである。彼らは文語浄化が進展すれば、古ブルガリア文学はヴィザンティンの精神面での成果に追いつき、シメオン帝の「黄金の世紀」の時代の様に、ヴィザンティン精神と交流を持った民衆の芸術性と価値観の回復をはかりうると確信していた。

エフティミは国家の統一という目標と共にスラヴとバルカンの相互理解のために戦い、ブルガリア人だけでなくセルビア、ロシア、ウグロヴァラキア（ルーマニアのヴァラキア地方）とモルドヴァの人々の教育にも取り組んだ。ヴェリコ・タルノヴォでは彼の弟子たち、信奉者たちが安息の地を見つけることが出来た所以である。

彼は典礼改革にあたって、理想としての静寂主義に立ち返り、表現の正確さと明晰さを追求する必要があるとの態度をとった。こうして、彼の翻訳活動はロシアのキプリアノフの典礼改革へと受け継がれた。エフティミの文体改革は類似の機能の均等化、伝記と聖者賛辞の言葉を新しいタイプに改変することに反映された。それらの特徴は次のようなものである。

- 表現の叙情性に意を用い、同義語を豊富に使用すること。
- 修辞法を統一すること。
- 詩的な形容辞、隠喩、シンボル、対照法（対句）、迂言法、表現の豊かさ等に留意すること。
- 複雑で、修飾された句の使用に留意すること。

斯様な文体を身につけたエフティミの後継者の間では、しばしば „плета“（言葉を編む、賛辞をおくる）という動詞が用意された。これは「言葉の刺繍」と翻訳されるべきものである。特に、神に対してそれが似つかわしいであろうよ

うな言葉について、文体は静寂主義的配慮で統一された。エフティミの文献では、例えばその民族の抽象的心理（イメージ）について描写する場合も浄化の新しい原則が導入された。タルノフスカ文語学派は、14世紀から全スラヴ民族の文語の発展に尽くし、15世紀から16世紀にかけて全てのスラヴ・バルカンでのギリシャ正教社会の標準語発展に先魁をなし、重要な足跡を残した。

参 考 文 献

- (1) Димитдър Кенанов, «Йоан Екзарх, Патриарх Евтимий и творчество на Йоан Дамаскин», *Българистични и славистични изследвания*, Великотърновски университет Св. Св. «Кирил и Методий», Велико Търново, 1991
- (2) Велчев, В. Търновската книжовна школа и предренесансовото движение на Балканите. — ТКШ, т. 1, 1974
- (3) И. И. Срезневский, Материалы для Словаря древнерусского языка, т. 1-3, АН СССР, 1958
- (4) Давидов, А. Към лексикалната характеристика на Търновската книжовна школа. 1900, № 4
- (5) Динеков, П. Търновската книжовна школа (История, основни черти, значение). Ст. Л., 20, 1987 Георгиев, Е. Търновската книжовна школа

- и нейното значение за развитието на руската, сръбската и румънската литература. — ТКШ, т. 1, 1974
- (6) Търновската книжовна школа в развитието на българската литература.
— В: Динеков, П. Похвала на старата българска литература. С, 1979
- (7) 山口巖、「ロシア中世文法史」名古屋、1991年
- (8) 岡本崇男、「三度目の南スラブの影響について」神戸外大論叢 第47巻第
1—4号、1996年6月